

追放された元聖女は、

冒険者として自由に生活します!

Tsuiho sareta moto seijo ha
bokensha toshite jiyu ni seikatsu shimasu

1

夏灯みかん

[Illust] しんいし智歩

Character

Introduction

大司教

キアラ王国の
大司教。
祈りの仕事を
レイラに
押しつけていた。

ソーニャ

かつてステファンと
パーティーを
組んでいた
魔法使い。

ナターシャ

マルコフ王国にある
冒険者ギルドの所長。

テオドール

ナターシャの夫。
街の教会で働く。

ノア

ナターシャと
テオドールの
息子。

ライガ

ステファンの相棒。
狼の獣人で、
気性は荒いが
根は優しい。

ステファン

B級冒険者。
レイラの保護者となり、
彼女を妹のように
可愛がる。

レイラ

キアラ王国の聖女。
規格外の魔力を持つが、
年齢に対して
見た目が幼い。

第一章 元聖女は追放されました

外には、どんな世界が広がっているんだろう。

見上げた天井に私の顔が映っている。ここは祈りの間。

部屋全体が白水晶でできていて、窓はない。

私は毎日、朝から晩まで、この小さな部屋で祈りを捧げている。

——また、祈りの続きをしなくちゃ。

目を閉じ、手を胸の前で組んだその時……バン！ と大きな音がして、大神殿に繋がる扉が開いた。驚いて振り向くと、そこには私の婚約者である王太子様——エイダン様がいた。

「レイラ！ お前との婚約を破棄する！」

突然現れたエイダン様は、驚いて目を丸くする私を、びしっと指差して、そう叫んだ。

「お前のようななどこの馬の骨とも知れぬ者が、王妃になれるわけがないだろう！ 僕はハンナと結婚するんだ！」

エイダン様の腕に手を絡めてうなずいているのは、公爵令嬢のハンナ様。教会の式典で一度だけ見かけたことがある。その時、綺麗なドレスがよく似合っているな、と羨ましく思った覚えがある。

だって、私は聖女だから。いつも白くて地味な神官服しか着られないんだもの。

今日もハンナ様は、金髪によく映えるオレンジ色のドレスを着ている。思わず見とれるくらい、素敵なドレス——

「ちよっと、あなた！ 聞いているの？」

うっとり見ていたら、ハンナ様が怒った。

「……えっと、婚約破棄ですよね？」

エイダン様の言葉を復唱して、私は大きくうなずいた。

「——わかりました」

エイダン様が言っていることは、その通りといえばその通り。私が王妃なんて恐れ多い。

私は自分の親の顔を知らない。物心ついた時には、このキアラ王国の大神殿にいた。身寄りのない私を育ててくれたのは、大司教様と神官たち。強い魔力があるらしい私は、いつの間にか女性神官の最高位『聖女』に任命されていた。そして最近、大司教様が王太子のエイダン様との婚約を決めてしまった。大司教様の決めたことに意見はしなかった。——育ててもらった恩があるから。けれど、王妃になるのはハンナ様みたいな貴族のお嬢様のほうがいいに決まっている。

「わかりましたって……そんな簡単に言われたら、私が譲られたみたいじゃない……」

ハンナ様はさらに怒ったような顔になった。

「エイダン様！ 私、この子に、嫌がらせをされたのです」

「嫌がらせだと!?!」

「——礼拝堂で！ 私は女神様の前に立つ資格がないと言って、私だけ外に追い出したのです！」

そんな権限、私にはないんだけど……

「そんなことをしたのか!? レイラ！」

「やってないです……」

私はぶんぶんと左右に首を振った。でもエイダン様は、ハンナ様の言うことしか耳に入らないみたい。

「自分の悪事を認めもしないとは、性根まで悪いのか……よくそれで聖女が務まる！」

エイダン様はハンナ様を抱きしめて、再び私を指差した。

「だいたい聖女といったって、お前の祈りがどれだけ国の役に立っていると言うんだ！ この金食い虫め！」

私は言葉に詰まり、黙り込んだ。

確かに、小さい頃から毎日言われた通りに祈っているけれど、それでなにかが変わったと思えることは一度もなかった。祈ると女神様の像が白く光るけれど、それだけだ。

それでも、毎日朝から晩まで祈り続けて、頑張ってきたのに……。それを全否定されると、胸の奥がきゅっとして、なにも言えなくなる。エイダン様はうつむいた私に言い放った。

「凶星か！ 神殿のお飾りに過ぎぬ、役立たずの聖女などいらん！」

そして大きく息を吸い込んで、怒鳴った。

「僕の国から出ていけ!!」

——出ていけ。

私はばつと顔を上げた。

「出ていって……いいんですか？」

「え？」

思わぬ返答だったのか、二人は顔を見合わせた。胸の奥がすうっと軽くなった。

もう頑張らなくて、いいんだ。

自分で言うのもおかしいけれど、『聖女』の生活はしんどい……。一日中、膝をついて祈っていると、足の感覚がなくなっていく。一番きついのは、食事。食事は朝と夜、それぞれパンと野菜が少し入ったスープだけ。スープの底に沈んだ野菜を探して、何度もスプーンを動かさないといけない。

育ち盛りの身には、正直きつい。そのせいか、もう十六歳になるはずなのに、白水晶の壁に映る私は子どもみたい。

それでも「身寄りのないお前を育ててやったのだから、お前も国のために恩返しをなさい」って大司教様に言われて、頑張ってきたけれど——

「私、もう、出ていってもいいんですねっ!？」

私はエイダン様に再確認した。

「あ、ああ、出ていけ、今すぐだっ」

エイダン様は繰り返し「出ていけ」と叫んだ。

——次の国王になる王太子様がそう言うのだから、私はもうお役御免つてことで、本当にいいんだよね！

私は解放感に包まれて、ふわふわした気持ちになった。

「今、荷物をまとめてまいりますっ」

そう言うと、祈りの間に隣接する自分の寝床へ行って、荷物をまとめた。荷物といっても洗い替え用の神官服が一着と、神殿に引き取られた時に持っていたという、刃物で刻んだみたいな傷がたくさん入った緑の石のペンダントだけ。

「欲があると聖魔法の効力が鈍るから、私物を持つてはいけない」と言われてきたから、自分のものはこれしかない。

祈りの間に戻ると、エイダン様と呼んだ兵士さんたちがたくさんいた。

「お前たち！ こいつを隣の国まで運んで、門の前にも置いてきてくれ！」

「お隣の国まで、送ってくださいですね！」

そう言うと、エイダン様は苦いものを食べたみたいな顔で怒鳴った。

「違うっ、お前を国外に追放するんだっ」

兵士さんたちは、神殿の外に停めてあった馬車の荷台に私を乗せた。ガラガラガラと馬車が走り出す。

「王子!! レイラをどこへ——」

騒ぎに気がついた大司教様が、大慌てで走ってくるのが見えた。

「うるさいっ！ 僕に指図するな!!」

エイダン様が、腕に縋りつこうとした大司教様を突き飛ばす。転んだ大司教様は地面に倒れ込んだまま、私に向かって大きな声を出した。

「レイラっ、育ててやった恩を、忘れたのかっ」

「それはありがとうございます！ でも、王太子様が、もういいって言うてくださっていますし！」
だんだん遠ざかっていく大司教様に、私は呼びかけた。

「私、今まで頑張ったと思うので……」

息を大きく吸い込んで、口に両手を当てて、大きな声を出す。

「これからは、もつと、かわいい服を着て、おいしいものをたくさん食べたいんです!!」

エイダン様も、ハンナ様も、大司教様も。馬車が進むにつれ、小さく、小さくなっていき——とうとう見えなくなつた。

私は前を向いた。

——この先には、なにがあるんだろう。胸が高鳴った。



「まさか、いつも三日かかる道が一日で着くなんて……」

キアラの国境の壁の前。私を運んでくれた兵士さんは額の汗を拭いながら、目を大きく見開い

て壁を見つめた。

「あなたの祈りの力はすごいですね。道中、疲れを全く感じませんでした……」

兵士さんたちは私に頭を下げる。

私は今、荷台ではなく、きちんと馬車の中に座っている。

移動の途中、兵士さんたちが辛そうだったので、疲れが和らぐよう、そっと祈ってみた。祈りは魔物を鎮めるだけでなく、人の痛みや疲れも鎮める——そう教えられてきたから。神殿には病気の人もよく訪れていた。

祈ると、兵士さんたちはみるみる元気になった。感謝されて、私は荷台から馬車の中に移してもらえた。彼らは一睡もせず馬を走らせてくれて、朝になったら国境についていた。

「こちらこそ、途中、おいしい食事をありがとうございました」

途中で食事休憩をとったんだけど、その時に兵士さんたちは、私に干し肉の載ったパンを食べさせてくれた。——何年ぶりのお肉だったかわからないけど、口の中でとろけるみたいで、ちょっとしょっぱかったけれど、すごくおいしかった……

記憶にある限り、私はほとんどお肉を食べたことがない。『食べるな』ときつく言われていたから。

いつだったか、大司教様の部屋からいい匂いがして、気がついたら足が勝手に動いて、部屋に入ってしまったことがあった。大司教様の机の上には大きなお肉の塊があって、それを口にしてしまった私は、ひどく叱られ、しばらく祈りの間に閉じ込められた。

間拔けな声を出した私は、自分の足が宙に浮いていることに気づいた。神官服の襟首をなにかに噛まれている感触がして振り返る。そこには銀色の毛をした大きな犬の顔があった。

「犬？」

私はその犬に襟首をくわえられたまま、銀色のふかふかした胸の毛に手を伸ばした。

「……犬だ！」

犬は見たことがある。たまに礼拝に来る貴族の男の人が、白いむくむくした大きな犬を飼っていて、いつも一緒に連れてきていた。それをちらつと見るたび、「触らせてもらえないかなあ」と思っていたんだ……。わしゃわしゃと毛を撫でる。

「犬じゃねえ！俺は狼だ！」

私の襟首から口を離すと、そのずいぶん大きな犬……もとい狼が怒った。牙の生えた大きな口から、しゃがれ声をする。

「しゃべった……」

私はびつくりして狼を見つめた。よく見たらその狼はスポンを穿いていて、手も人間のような形をしている。

「あれ、狼って指が五本もあったかな……」

私がそう呟くと、狼は「がうっ」と吠えた。

「ねえよ！俺は狼男だっ」

そう怒鳴りながら、また私の襟首をくわえて、狼男は高く跳んだ。今までいたところを竜の吐い

た炎が直撃して、地面が黒く焦げる。

「つたく、邪魔すんなよ」

街道横の原っぱに着地した彼は私を下ろすと、赤い竜のほうへ走り出した。竜は彼に照準を合わせて口を開ける。狼男が……焼けちゃう……

私は慌てて手を前で組むと、祈りの言葉を早口で呟いた。私の祈りは、守りの壁を作ることができ……はず。

「女神様、その慈悲の恵みを我にお与えください、我は望みます——」

その時、狼男が叫んだ。

「ステファン、今だっ」

その声に応えるように、燃える荷馬車の近くに人影が現れた。その人は煙を上げる荷台を蹴って、狼男に向かって炎を吐こうと長い首をもたげる竜の上に、高く跳んだ。振り上げた剣の刃先がきらりと光る。炎が吐き出された瞬間、狼男は目に留まらない速さで身を翻した。

狼男は竜の炎から逃げた？よかった!!でも、このままだと、竜が殺されちゃう……

私は祈りの言葉の続きを叫んだ。

「——その赤き竜をお守りください！」

カキンッ!!振り下ろされた刃が空中でなにかに弾かれた。同時に人影も弾かれて下に落ちる……かと思っただけで、空中で一回転して、すどんと地面に着地した。私は思わず拍手をしそうになる。



「ステファン、大丈夫かっ!？」

狼男は、そのくるりと着地した剣を持った人——ステファンさんに、すごい速さで駆け寄った。

「ああ、問題ない。それより今の——剣が弾かれたのは、防御魔法？」

剣を構えなおしながら、その人が私を見た。短い金髪に青い瞳の、端正な顔立ちの若い男の人だった。

「お前がやったのか？」

狼男が緑の瞳でぎろりと私を睨んだ。思わず身体が強張る。さっき竜の首を切ろうとした剣が弾かれたのって、私が「竜を守ってください」って祈ったからだよね……。こういう場面で祈ったことは初めてだから、そんなことができるなんて知らなかった。

「ご、ごめんなさい。でもその竜は……悪くない、気がしたんです……」

この狼男、牙をむいていて、顔が怖い……。さっきふかふかかわいいなんて思ったのは、間違いだっただけ……

「悪くない？ 荷馬車を燃やした竜が悪くないって!？」

狼男はさらに凄んだ。ステファンさんがその肩を押さえる。

「熱くならないでくれよ、ライガ。今はそれどころじゃない」

そんな話をしている間に、竜がまた炎を吐こうとしていた。

本当にそれどころじゃない状況!! 私にできることは? ——両手を組み直して、また祈りの言

葉を唱える。本物の魔物を前にするのは初めてだけど、毎日祈っていたのは、国の周りの魔物を鎮

めるためだと言われていたから、折れば効果があるはず。

「我は望みます、その竜の心が鎮まりますことを……」

ばあつと明るい光が竜を包んだ。巨体は力を失い、そのまま地面に倒れ込む。

「——眠ってる？」

倒れた赤い竜に近づいた狼男——ライガ——が鼻でくくん匂いを嗅いで呟いた。

「君がやったの？」

ステファンさんが驚いたような顔で私を見る。私は「たぶん、そうです……」と答えると、その場にへたりこんでしまった。

——うまくいって、よかつたあ。私が祈ると魔物って眠るのね……!?

なんだか身体に力が入らない……。魔物の前で祈るのは初めてだったので、効果があったことに安心したのと、道中、兵士さんと馬の疲れを癒そうと祈っていたから……連続でお祈りをしたせいかな。

「竜は、し、死んでないのか?! 殺せ、はやく、殺せっ」

その時、道の外の草地のくぼみから、おじさんがひょっこり出てきて、竜を指差して叫んだ。

「ちよっと、あの、それは……その竜は……」

私はへたりこんだまま手を伸ばした。

「悪意があるわけじゃない、ってことだよね？」

ステファンさんが剣を鞘に収めて、にこりと私に笑いかけた。私はほっとして、うなずいた。お

じさんは引き続き大きな声でわめいた。

「そのガキはなんだ!」

「私はレイラと申します。キアラ王国の大神殿の聖女——、あ、元聖女です」

「君が——『聖女』？」

ステファンさんが目を丸くしている。まあ、自分のことを『聖女』っていうのは、おこがましい気もするんだけど。大神殿の女性神官最高位の『聖女』に任命されていたのは本当のことだ。

「王太子様に国を出ていけと言われて、出てきたところなんです、とにかく……」

私はじつと彼の青い瞳を見つめた。

「その竜は……混乱していただけ、というか……そんな感じがしたんです」

「確かに」と呟いてから、ステファンさんはうなずいた。

「——こんな街道に火竜が出るのは、おかしい」

それから彼はおじさんに視線を移した。

「ご主人、なにか思い当たることはありませんか？」

「うるさい!! 護衛は護衛の仕事だけしてろっ!! その竜を殺して、荷馬車の火を消し、荷物を確保して、逃げた馬を回収しろっ!!」

「それもそうですね」

ステファンさんは、ばちばち音を立てて燃えている荷馬車を見て溜め息をついた。横倒しになつた荷馬車からは、棒状に巻かれたいろんな色の布がころころと転がり出ている。——布の行商をし

ているのかな。

私は大神殿の上から街を見まわした時のことを思い出した。広場で行商の人たちが賑やかに露店を広げていたっけ。

いろいろな色の布。ああいうカラフルな布を使ったドレスが着てみたいなあ。燃えてしまったら、もったいない。

私はうずくまったまま胸の前で手を組んだ。

聖魔法が魔物や災厄を鎮めるのだとしたら。大事なものを燃やす、この火も鎮められるんじゃないかな？ 「火が消えますよう」と祈りの言葉を口にすると――炎は何事もなかったように綺麗に消えた。

「すっげー……」

ライガが感嘆の声を上げて、すっかり消火された荷馬車と私とを見比べた。私は得意な気持ちになつて、ふふんと笑う。――けれど、急に頭痛がして、その場に膝を抱えてうずくまった。

「大丈夫？」

ステファンさんが駆け寄ってきてくれる。

「ありがとうございます。私は大丈夫なので、布を出してあげてください。せっかく綺麗な布なのに、もったいないです……」

私は焦げた馬車の積み荷を指差して言った。

「こちらこそありがとう。そうするよ」

ステファンさんはそう言うと、ライガと二人で無事な積み荷を外に出す作業を始めた。

「大丈夫ですか！」

後ろで様子を見ていた兵士さんたちが私のところに駆けつけた。行商のおじさんは、ずっと「竜を殺せ！」と叫び続けている。ステファンさんとライガは二人で黙々と積み荷の救出作業。

しばらくそうしていると、ライガが馬車の中から金属製の大きな宝箱を見つけた。

「なんだ、これ……」

ライガは宝箱の前に両手をつけて鼻を近づけると、くんくと匂いを嗅いだ。それから、ぴくつと動きを止めてステファンさんのほうを見る。

「ステファン、中から魔物の匂いがするぜ」

「なんだって？」

ステファンさんは手を止めると、じっとおじさんを見つめた。

「ご主人、この中にはなにが？」

「な、なんでもない、それより早く竜を殺せっ!!」

……おじさんの顔は汗がだらだらだった。『なんでもない』わけ、なさそう。

私から見ても怪しいその様子に、ライガとステファンさんは顔を見合わせた。

「ライガ、開けられるか？」

「任せとけ」

狼男は宝箱を掴んで手でこじ開けようとする。ばきばきばき!! と音を立てて宝箱が開いた――

というより、割れた。

——宝箱、金属製だよね……？

鍵なんて、あつてないようなものだ。狼男つて、すごい力持ち……

割れた宝箱の中から「ごろん」と音を立てて、白い、人間の頭より大きな丸いものが転げ落ちた。ライガは宝箱を放り捨てると、その丸い塊を、地面に落ちる前にキャッチした。そして匂いを嗅いで、緑の目を見張った。

「……竜の卵だ」

私もその大きな白い塊を見つめる。これが、竜の卵？ 大きい……何人分の卵焼きができるんだろう。神殿ではお肉は食べちゃダメだったけど、体調が悪くて寝込んだ時だけは、卵を食べさせてもらった。それがとつてもおいしくて、食べさせてもらうため、わざと風邪をひこうと思って、窓を開けっぱなしで寝たこともある。

つて、今はそんなことじゃなくて。

「ご主人？ 竜の卵の売買は魔物取引法で禁止されているって、当然ご存じですよね」

私が卵に思いを馳せている間に、ステファンさんが剣先をおじさんに突きつけていた。

「わ、私はただ、運ぶように言われただけだ……」

竜の卵って売ったり買ったりしちやいけなんだ……。私は外のルールをなにも知らないのだと恥ずかしくなった。売り買いしちやいけないうことは、食べるのもダメなのか？

「うわああああ」

そんなことを考える私の隣で、おじさんは急に立ち上がって駆け出した。ステファンさんは、おじさんの足に自分の足を引っかけて転ばせると、どこからかロープを取り出して、倒れたおじさんの両手を後ろ手に縛った。

「違反行為でギルドに引き渡します」

ライガが卵を両手で持ったまま、眠る竜を見つめて呟いた。

「卵を追いかけてきた……のか？」

ステファンさんがうなずく。

「そうだろうね。火竜がこんなところに現れるなんて、そうとしか考えられない」

「卵を返してやれば、山に帰るかな」

ライガは卵を竜のそばに持っていくと、そつとその隣に置いた。それから、私に聞いた。

「なあ。これ、どれくらいで目覚めるんだ？」

「——わかりません。本物の魔物に祈りの力を使ったのは、初めてなので……」

私は兵士さんに肩を借りて、なんとか身体を起こすと、首を振った。

「——初めてだつて？」

ライガは牙をむいて、ぐるぐるると唸り声を出した。うう、その顔怖いんだけどなあ……

「初めて、に俺たちを巻き込んだのか？」

「だ、だつて……」

「だつてじゃねえ！ うまくいったからよかったものの、そうじゃなきゃ……」

ステファンさんが、ぽんぽんと狼男の背中を叩く。

「まあ、彼女のおかげで無駄な争いをしなくて済んだなら、よかったじゃないか。火だつて消してもらったんだし」

「ステファンさん……」

良い人だ。温かい言葉に胸がじんとしたところで、地面に倒れ込んでいた竜が突然、ぱつと起き上がった。

「うわ、動いたあああ」

ライガが大声で叫んで、ちょっと離れたところにいる私のほうへ飛びのいた。すごいジャンプ力!!

……感心している場合じゃなかった。私は祈りの準備に入る。二度目も効果あるかなあ。

「待って」

その時、ステファンさんが私を手で制止した。彼の視線の先を見ると、竜が吠え声を上げようとしていた。

グウアアアアア!! 竜は大きく鳴くと、ライガの置いた卵を前足で抱えて、羽ばたいた。

「——飛んでいった」

みんなが空を見上げる。赤い竜はそのまま山の向こうに飛んでいってしまった。

「一件落着……ですか?」

私はステファンさんとライガの顔を見た。二人は顔を見合わせて、「ああ」とうなずいた。

「その人はどうなるんですか?」

縄で後ろ手に縛られているおじさんを見て、尋ねる。竜の卵を売るのでそんなに悪いことなのか……

「冒険者ギルドに連れていきます。キアラ王国にはギルドがないから……、このまま目的地のマルコフ王国かな」

ステファンさんが答えて、ライガと目を合わせると、彼も「そうだな」とうなずいた。

マルコフ王国はこの街道を真っ直ぐ進んだところにある、キアラ王国の隣国で、私のとりあえずの目的地。そっか、目的地一緒なんだ……

「それより、君、キアラ王国の大神殿の聖女様って言ってなかった?」

ステファンさんが思案する私に聞く。

「——『元』です。王太子様に出ていけと言われまして、隣国まで兵士さん方に送っていただく最中だったんです」

私はそう言って、兵士さんたちを振り返った。すると——、兵士さんたちが地面にへたりこんでいた。

「なんだか、身体に力が……」

ついでに私が乗っていた馬車を引いていた馬も、地面に横になって休んでいた。

「か、身体中の筋肉が痛くて……」

私は背筋がさーっと冷たくなる感じがした。まさか、私が疲れてそうだと思って祈って、通常三

日の距離を一日で完走したせい……？

「ご、ごめんなさい……」

慌てて手を組みなおすと、祈りの呪文を唱えはじめる。

「私はこれから先、自分で行きますので、皆さんはお帰りください……女神様、我は……」

白い光がふわりと兵士さんたちの上に舞い降りて、みんな次々に立ち上がった。

「ああ、元気になってきました。これなら最後までお送りできそうです」

私はぶんぶんと首を振った。

「お気持ちだけで十分です。それ……一時的みたいなので、家に帰ってよく休んでください……」

「そんな……」

「いえ、本当に」

そんなやりとりをしていた私たちのところに、ステファンさんが来て、言った。

「マルコフ王国までなら、僕たちが彼女を送っていきますよ」

——良い人、やっぱりステファンさん、すごく良い人だあ。



「おとーさん……」

暗闇に向かって私は呼びかける。

ここはどこ？ —— 神殿じゃない別の場所だ。

お腹が減っていて、寒くて、辛い気持ちが進み上げてきて、私は大声で泣いた。

「わあああ、おとーさん、どこ……」

直後、頭に鈍い衝撃が走った。

「うるせえんだよ！ 黙れクソガキ!!」

怒鳴られて、怖くて、また泣き声を上げると、その人が再び拳を振り上げた。

「だけど——」

ワンワン!!

どこからか犬の鳴き声をして、私に振り下ろされる手に噛みついた。

「ルナ、ありがと、ルナっ」

私はその犬の首を抱きしめて、ふわふわした銀色の毛を撫でた——そうだ、毛が銀色で、夜空の

お月さまみたいだから、名前を『ルナ』にしたんだ……

「痛え、痛えって」

——え？

私はそこで急に現実に戻った。これは、狼男の首……

今、私は、確かに、ふわふわした銀色の毛が生えた犬っぽいものの首を、力いっぱい抱きしめてる。

「わあああ、ごめんなさいっ、私、首を」

手を離れた途端、身体がぐらりと傾いた。——私は、狼男ライガの背中に背負われていた。背中で暴れるな!!」

ライガは「よいしょ」と私を背負いなおした。

兵士さんたちに帰ってもらった後、二人と一緒に「さあ行くぞ」となった時、急に頭痛がして——そこから記憶がない。

「魔法の使いすぎかもしれないね」

横合いから声がした。剣を腰に差したステファンさんがつこり笑っている。

「僕も少し魔法を使えるけど、使いすぎると頭、痛くなりますよね」

私は周囲を見まわした。馬が二頭いて、一頭は燃え残った積み荷をいっぱいぶら下げていて、もう一頭には、手を縛られ口輪をはめられたおじさんが乗せられている。その横を、私を背負ったライガとステファンさんが歩いている。

「あ、ライガありがとう、もう歩けると思う……」

私はライガの背中から降りようとしたけど、ふさふさした手はそれをさせてくれない。彼はまた牙を剥き出して唸った。

「どうせ歩いたってゆつくりだろ。迷惑なんだよ」

「その顔……怖いからやめて……」

私はそう言うことから、ステファンさんのほうを見た。

「すみません、ご迷惑かけて……。ステファンさんも魔法を使えるんですか？」

「少しだけね。——あ、少しだけです。レイラさんほどはとも」

言い直したステファンさんに、私は手をぶんぶん振った。

「そんな丁寧な口調にしないでください。私のことはレイラで結構です」

「じゃあ……僕のことステファンでいいよ。旅仲間だしね」

ステファンがつこり笑ったので、私は思わず照れた。今まで、私の身近にいた男性といえば、大司教様か国王様くらい。若い人だと、たまに王太子のエイダン様を見るくらいで、あんまり比較対象はいないのだけど、ステファンはそれでもかなり整った顔立ちなんじゃないかな。

「おい」

ライガが不機嫌そうな声を出した。

「お前、なんでステファンにだけ『さん』付けなんだよ。俺のことは、はじめから呼び捨てにしてただろ」

「ご、ごめんなさい、狼だから……かな? つい……」

ライガは最初から妙に親近感があって、呼び捨てにしていた。彼は振り返り、牙を見せる。

「うわ。人間様の差別発言だ。聖女様ともあろうお方が、他種族差別ですか」

「聖女って……元、だから、元! でも、ごめんなさい。失礼でしたね、ライガさん……」

そう言うのと、ライガは黙ってから、また牙を見せた。

「そういうことじゃないんだよ。呼び捨てでいいよ、呼び捨てで」

「じゃあ……呼び捨てで……。でも、どっちでも怖い顔をするの？」

「ライガ、笑顔、笑顔」

ステファンに笑いながら言われて、ライガはむすつとしたまま固く口を閉じた。



日が西に傾いてくるころ、私たちは足を止めた。

「今日はあの辺りで野宿だね」

ステファンが街道外れにある空っぽの馬宿と井戸と石畳がある場所を指差した。旅人の野宿用の場所みたいだ。そこへ移動して、ようやく私はライガの背中から降ろしてもらえた。

「ここまでありがとう。……その、重かったでしょ」

何時間も人を担いで歩き続けるなんて、狼男ってすごい体力だなあ。

「いや——軽すぎる」

ライガは眉間に皺しわを寄せて私を覗き込んだ。

「お前、骨と皮じゃねえか。ちゃんと食べてるのか？」

恥ずかしくて顔が熱くなった。確かに、私はガリガリだ。だって最低限の食事しかできていなかったし。でも人に言われると、恥ずかしい。

「あんまり……お肉とかも、食べちゃだめだったし」

「えっ、肉を食べたら駄目なのか？」

「うん。肉食は聖魔法の力を弱めてしまうからって——」

「……かわいそうだな」

ライガは心底同情するように呟いた。同情されると、余計に辛い……

そうだよ、しっかり食べられないなんて、傍たはから見たらかわいそうだよ。私だって好きなものたくさん食べたかった。どうして、今まで我慢していたんだろう。——だって、親に捨てられたのを、育ててもらったし……。そういう恩は返さないとしよう……？

「うう……」

いろいろ考えていたら、涙が出てきた。

「え……、おい、なんで泣いてるんだよ！」

ライガは手を地面について四つ足になったり立ち上がったたり、面白いほどうろたえている。

「好きなもの……本当はいっぱい食べたかった……、ドレスだって、ハンナ様みたいな、かわいいのを着たかったし、お茶会とか、私も出てみたかったあ……、ううあああ」

「そうか、そうか。……いろいろと、大変だったんだな」

狼男はふさふさした手でぼんぼんと私の頭を叩いた。

——あれ？ ……なんだか、このふさふさした手が頭に触れる感じ、前にもどこかで、あったよ
うな？

「ライガ、なにしてるんだ？」

私が首をかしげていると、馬を小屋に繋いでいたステファンが呼びかけた。
「なんでもねえ」

ライガは急に黙った私を不思議そうに見ながら、ステファンに大声を返した。
「今日の夕食は豪華にしようぜ！」



パチパチと燃える薪まきの上で、鍋が煮立っている。鍋の中では、お肉やキノコ、野菜がぐつぐつと踊っていた。

私はそれを一口食べて、絶句した。

「……表現する言葉が見つかりません」

神殿で食べていたスープとは、味の深さが段違いだった。あのスープが地面だとしたら、これは天まで届くくらいの味わいだ。

「こんなにおいしいスープ、初めて食べました」

「そんな風に言ってもらえると嬉しいな」

ステファンはにこにここと笑っている。私とライガは焚火たきびを用意しただけで、料理は全部ステファンが作ってくれた。

「そんなにうまいか？ 俺は肉が入っていれば、なんでもいいけどな」

ライガは、お肉ばかりをお椀わんにすくいながら言う。

「こいつはいつもこんな感想だから、作り甲斐ががなくてね。——おいライガ、野菜も食べる」

ステファンは野菜をすくってライガのお椀わんに盛った。それから縛られたままのおじさんを連れてくると、縄をほどいてあげて、お椀わんを差し出した。

「あなたも食べてください」

周囲をきよろきよろ見まわすおじさんに、ライガがぐるぐると唸って牙を見せる。

「……いただく」

おじさんはスプーンですくってスープを食べはじめた。それから「はぁ」と溜め息をついて、私たちに頭を下げた。

「悪かった。まさか火竜が卵を追いかけてくるなんて、思わなかったんだ」

「マルコフ王国で売るつもりだったんですね？ 売り先は誰ですか？」

ステファンは柔らかい物腰で聞いた。おじさんは黙り込む。

「言ってもらえれば、処分は軽くなりますよ。通商手形の制限は避けられないでしょうが——しばらくギルドのお手伝いでもすれば、それで済むかもしれません」

「……すまないが、それは言えない」

おじさんはそれ以上、なんにも言わなかった。しんとした空気が流れる。今聞いたらいけない感じなのはわかる。わかるけど、気になる……。私は恐る恐る手を挙げて聞いた。

「竜の卵を売るので、そんなにいけないことなんですか」

「ダメに決まってるんだろ」

ライガが「がうつ」と吠えた。それからおじさんを見ながら脅すように言った。

「火竜の卵の違法売買なんかしたら、魔法使いギルドに引き渡されて、魔法の実験台にされても文句言えないぜ」

どうして？ 私は首をかしげる。

「レイラ、竜は卵から育てるとね、人の言うことを聞くようになるんだ。背中に乗ったりもできるんだよ」

ステファンの言葉に、私はわくわくして「わぁ」と声を出した。

乗れるの？ 竜に？ それってとっても素敵！

「だから卵を欲しがる人間は多い。でも、あの火炎だから——あんなのに乗って戦ったりしたら危険だろう？」

ステファンは焚火を見つめた。

「それで魔法使いギルドが、無許可の取引を規制しているんだ。違反者がいたら捕まえてくれて依頼が魔法使いギルドから冒険者ギルドに来ていてね。僕たちは冒険者だから、違反者を見つけたら引き渡さないといけない」

「でも」と付け加えて、ステファンはおじさんを見た。

「取引相手を教えてくれたら、あなたを魔法使いギルドに引き渡さないよう、力になれると思いますが、どうですか？」

「——」

おじさんは黙り込んでしまった。私は恐る恐る聞く。

「……魔法使いギルドに引き渡されたら、本当に魔法の実験台にされちゃうんですか？」

「——ああ」

ライガが声を落として言った。

「戻ってきたやつ、見たことないぜ」

ひっ、とおじさんが息を吸った。ライガは言葉を続ける。

「魔法使いつてのは、変なやつらばっかりだからな。なにをされるんだろうなあ」

空気が凍った。ステファンはおじさんの肩を叩いて、優しい口調で言った。

「明日の夕方までにはマルコフ王国の冒険者ギルドに到着できるようにしよう。よく考えておいてくださいね」

そして何事もなかったかのように、食事を続けた。

——食後、ばんばんのお腹を抱えながら、私は呟いた。

「こんなにお腹いっぱいになったのは、初めてです……」

「このくらいでそんなに感動していたら、街に着いたら大変だね」

ステファンがデザートにと、果物の皮をむきながら笑った。

「街……。街には、もっとおいしいものがある？」

ステファンとライガは顔を見合わせる。

「マルコフ王国の王都にはおいしい料理屋がいくつもあるよ。なあ、ライガ」

「ああ、久しぶりに中央広場裏の《満腹亭》で焼肉を食いてえなあ」

「お前は肉ばっかりだな……」

私はふっと笑った。と同時に涙腺が急にゆるむのを感じた。

「ううう」

くつろいで地面に横になっていたライガが、慌てて起き上がる。

「今度は、今度はなんだ、どうした!？」

「人と……」

私は目元を拭った。

「人と一緒に食べると、食事ってこんなに楽しいんですね……」

今まで誰かこんな風に、火を囲んで食事をしたことなんてなかった。

大神殿にいた頃は、夜が明ける前と沈んだ後に、お世話係の神官が私の個室にパンとスープを運んできてくれた。それを窓から見える外の壁を見ながら……毎日毎日……一人で食べていた。

「外に出てきて、よかったね」

今度はステファンがぼんぼんと肩を叩いてくれた。その夜は二人がテントを張ってくれて、ライガに「お前が使え」とそこに押し込まれたので、言葉に甘えてそのまま横になった。満腹感と幸福感に包まれて、私はすぐに眠りに落ちた。



——その夜。

キアーラ王国の王宮では、大司教ミハイルが王太子エイダンに詰め寄っていた。

「エイダン様！ レイラを勝手に追放なさるなど、なにをお考えなのですか?!!」

「うるさい！ あんな薄汚い孤児を、勝手に僕の婚約者にするなんて、お前こそなにを考えているのだ！ 僕の妻は高貴な、このハンナだけだ！」

エイダンは傍らかたわらにいたハンナを抱き寄せる。ミハイルは宥めるように口調をゆるめた。

「確かにあの子はまだ、多少幼い見えますが、成長すればさぞや美しくなるでしょう。それに——形だけの王妃でも結構なのでございます。あの子は王妃という肩書きを与えてやれば、一生この国のために祈ってくれるでしょう。ハンナ様のことは、事実上の奥様になされば——」

「ひどいっ」

ハンナが涙を浮かべた。

「エイダン様！ このジジイ、あのガキを美しいだの言ったあげく、私に——公爵令嬢の私に、妾めかけになれと!!」

ミハイルはびくっと耳を動かすと、顔に青筋を浮かべた。

「ジジイっ？ 私は大司教ですぞ——」

「僕は王太子だ！ 口を慎め!!」

バシン!! エイダンはミハイルに近づくと、頬を思いつき叩いた。

「お前は聖女を王妃にすることで、王家に口出ししたいだけではないかっ！」
痛いところをつかれたミハイルは、叩かれた頬を押さえたまま押し黙った。

最近、「もつとおいしいものが食べたい」だの、「神官服じゃない服が欲しい」だのと世話係にこぼしていたレイラを再び聖女の仕事に集中させ、さらに神殿の国政への影響力を強めるために、レイラを王子と結婚させるといのは一石二鳥のアイデアだと彼は思っていた。国王と王妃は納得させたのに、この王子は、自分の言うことに耳も貸そうとしない。

「エイダン様。レイラは、確かに生まれは卑しいかもしれませんが、魔力は誰よりも強いのです。あの子を王妃にして祈りに集中させれば、国は安泰なのです」

「うるさい、うるさいっ!! あいつがいなくなっとなんの問題がある？ 大体、僕はお前たち神官が嫌いだ。神殿にこもって祈ることのなかが国のためになっているのだ！ お前たちが国の金で贅沢な暮らしをしているのを、僕は知っているのだぞ！」

「王子、私たちが魔物を抑えているから国が平和なのですぞ！ 私たちが祈っているからこそキアール王国には魔物が少なく、冒険者ギルドだの魔法使いギルドだの、政治に口出ししてくる厄介ものがいなくてもやっていけるのです！」

そう、キアール王国は大神殿の聖職者たちの祈りのおかげで、他国に比べて魔物による被害が断然少ないのだ。魔物被害が多い他国は、魔物退治のため冒険者ギルドや魔法使いギルドを国内に整備することで彼らに魔物を狩らせ、民の暮らしを守っている。しかしギルドは独自のルールで動いているため、国内に入れるのであれば、国の法の前にギルドのルールに従わなければいけない。エイダンは怒鳴り返した。

「『私たち』というなら、お前がレイラの分まで祈ればいいだけではないか。あんな浮浪児を聖女にするなど、それこそ大司教の名に泥を塗るようなものだろう！ ……お前たちの祈りとやたらに効果があるのか、疑問だがな」

ぐぐぐ、とミハイルは唇を噛んだ。

(小生意気なクソ王子め……)

レイラが来るまでは、確かにミハイルをはじめとした神官たちが祈ることで、キアール王国の平穏を守っていた。国を守るための祈りは重労働。祈りの純度を高めるため、食事制限や私欲の制限など、多大な自己犠牲が必要だった。しかしそんな時、運よく彼は見つけたのだ。神官数十人分の『祈り』を賄える魔力を持つ子どもを。

——それがレイラだった。

レイラに聖女の位を与え、祈らせるようになってからは、ミハイルたちの祈りは必要なくなった。ミハイルは祈ることをやめ、上等な肉を食らい、女を侍らせ、今まで抑圧していた欲を全て吐き出すように、豪遊の限りを尽くした。

(必ず、レイラを取り戻してみせるぞ)

ミハイルは爪が手のひらに食い込むほど強く、拳を握った。



おいしいものを誰かと楽しく食べた翌日は、なんて爽やかなんだろう。

私はいつも通り、日が昇る前に目を覚ました。焚火に枝をくべながら、ステファンが「早起きだね」と声をかけてくれた。

「ステファンこそ、早起きですね」

彼が起きているとは思わなかったので、話しかけられて驚いた。

「僕は朝の見張り。夜はライガ担当だ」

ステファンは馬小屋で丸まって寝ている狼男に視線を送った。

「そうだったんですね。見張り、ありがとうございます」

自分だけぐうぐうと寝ていたのが申し訳なくなり、私は頭を下げた。「いいよ、いいよ」とステファンは笑った。それからライガとおじさんを起こして、私たちは朝ごはんを食べた。

朝ごはんは、卵焼きとパンだ。鍋の上で焼けていく卵を見つめながら、私は昨日見た大きな竜の卵を思い出した。

「竜の卵は、食べたらず捕まりますか？」

ステファンとライガは顔を見合わせる。

「——希少だから、許可がないと、駄目だよ」

「許可があれば、食べられるんですね！」

「……そんなに食べたいのか？」

ライガが不審そうに言う。

「いえ、どれだけ大きい卵焼きができるのかなって思っ……」

そう言うと、ステファンは笑って、ライガは余計に不審そうな顔をした。「それより」とステファンが話を切り替える。

「今日の午後にはマルコフ王国に着くけど、君はそこからどうするの？」

私はしばらく考えて、呟いた。

「もったかわい服を着て、おいしいものを食べて暮らしたいんです……私」

「……いいね」

ステファンはうなずくと、笑った。

「やりたいことって、大事だよね」

それから真面目な表情になって、私に聞く。

「アテはあるの？ 住むところとか、お金とか……」

「う」と私は言葉に詰まった。

「とりあえず街に着けば、なんとかかなると思っ……」

「教会は？ 君くらい聖魔法が使える人はなかなかいないから、きっと大歓迎されると思うけど」

「教会はもう嫌です。神官服しか着られないので……」
私は首をひねった。

「ステファンたちみたいな——冒険者ってどうでしょう？ 昨日みたいに魔物を鎮めたりできたら、役に立てませんか？」

「確かに、聖職者で冒険者になる人は少ないから重宝されると思うし、なんだったら僕らの仲間に加わってもらえたらありがたいだけけど」
ステファンは笑った。

「冒険者ギルドの登録は十六歳からだから、もう少し待たないと駄目だよ」

私は溜め息をついた。ステファンがずっと子どもに接するような口調なので、薄々気づいてはいたけれど。彼は私をかなり年下だと思っっているみたいだ。

「私——十六歳ですけど」

私が言うと、ライガが露骨に驚いた顔で口を挟んだ。

「十六？ てつきり十二、三歳だと——」

私はまた深く溜め息をついた。満腹に食べてこなかったせいかわからないけど、私は同い年くらいの人に比べて、かなり背が低いし、顔も幼い気がする。

「大体ですけどね。生年月日がわからないので……」

深い溜め息交じりに言うと、ステファンは真剣そうな顔で私に聞いた。

「——そうなんだ。言いたくなかったら申し訳ないけど、レイラ、君は人間でいいんだよね？」

「人間だと……ずっと思っていましたけど……」

私は頭を抱えて呟いた。私、人間じゃない可能性があるの……？

「人間以外だと……どんなものがあるんでしょうか。この世界には……」

女神様の経典で、世界にはいろいろな種族がいるというのは知っていたけれど。キアラでは今まで、人間以外の種族というのは見ることがなかった。

「たとえば亜人種だと、ライガみたいな、動物の特徴を持つ獣人とか——」

ステファンは説明しながら、意外そうな顔をした。

「人間以外を見たことがないの？ ライガを見ても驚いていなかったから、そうは思わなかったけど」

「大抵の人間は悲鳴を上げるんだよな、俺を見ると」

ライガは「けっ」と舌打ちをする。それから首をかしげた。

「確かに。お前は俺を見ても、そんなに驚いてなかったな」

「そんなに、驚かなかったですよ。——私、人間以外だとどんな可能性があるんでしょうか……」
自分が人間なのかそうじゃないのかは、重要な問題だ。

「年齢より幼く見えるなら……大きなクラフトリン族とか？ ライガ、匂いでわからない？」

ライガは鼻を鳴らした。

「人間……だと思っけどな。こんなでかいクラフトリンがいるか？ それに魔法を使うんだろ。それに光神教の聖職者だ。光の女神様だっけ？ 信じているのは人間くらいだよ」

光の女神様は、私たちの神殿が祀る最高神の女神様だ。私は顔をしかめた。「そういう言い方はしないで。光の女神様はすべての人を平等に見守ってくださいます」「すべての『人』だろ。お前、人じゃなかったらどうするんだ。信じていた神様に見捨てられるな」

ライガはくつくつと笑った。本当に、かわいくない狼！

私はうつむいた。私は一体なんなんだろう。なんだか悲しくなってくる。

「そんなに落ち込むなよ」

ライガは焦ったように私の顔を覗き込んだ。

「そうだ、耳、耳を見せてみる。クラフトリン族はちよつと尖^{とが}ってるんだ」

そして、耳を隠すように編んでいる私の左右の髪をそつと持ち上げた。

「きやあああ」

私は叫んで耳を押さえる。私の耳の形はちよつとおかしい。他の人みたいに丸くなってなくて、半分切れたみたいにな少し変わった形をしていて、コンプレックスだった。

「ライガ、女の子に勝手に触るんじゃない」

「悪い、悪い」

ライガはおろおろと、また四足になったり二足で立ち上がったりを繰り返した。

「いいんです。騒いでもみません。昔から耳の形が変なの、ちよつとコンプレックスで」

私は覚悟を決めて耳を出した。

「……この耳、クラフトリン族ですか？」

「……」

耳をじっくり見て、二人は顔を見合わせた。

「わからねえな。尖っている気もするし……」

ライガが言う。ステファンが呟いた。

「人間とクラフトリンの混血——『ミックス』とか……？」

「聞いたことねえよ」

私はまた頭を抱えた。私は一体なんなんだろう……。でも。

「人間とクラフトリンのミックスって言ったら、冒険者ギルドに登録できますかね」

「種族も年齢も結局自己申告だし、問題ないと思う——けどね」

ステファンは「うーん」と困ったように笑った。

「冒険者は危ない仕事も多いし……。教会が嫌なら、どこか住み込みで働けそうところとかを探すのは手伝えるよ」

「住み込み……ってどんな仕事があるんでしょうか」

「宿屋とか、レストランとか……？」

レストランっていうのは、魅力的だ。おいしいものをたくさん食べられそうだし。——でも。

「『冒険者』っていろいろなところに行ったりできそうですね。私……せつかくなので、いろんな街とか、いろんなところに行ってみたいんです。……せつかく自由になったので！」

「まあ、いろんなところには行くよな」

ライガの言葉に、私は立ち上がった。

「じゃあ、『冒険者』登録したいです。聖職者なら、お仕事ありますよね！」

それから、ステファンに聞いた。

「私、『人間』って言ったら登録できないでしょうか」

「……君の場合、『人間』って申告したら、『もう何年かしてから来てね』って言われると思うよ」
ステファンは困ったような表情で言った。私は考えてから、うなずいた。

とりあえず仕事をしないと、生活ができない。それなら――

「自己申告でいいなら、『人間とクラフトリンのミックス』ということにします」
それからステファンに聞いた。

「……ところで『クラフトリン』ってどんな種族なんですか？」

「成人でも人間の子どもくらいの大きさで、見た目も幼く見えるけど、手先の器用な種族だよ」

ライガが呆れたように肩をすくめた。

「お前、適当すぎないか」

「……これからの生活がかかっているので……」

人間ではなさそうだということなら、それでやっていくしかない。

第二章 元聖女は冒険者登録をしました

人間――改め、人間とクラフトリンのミックスになった私は、ステファンとライガ、密売人のおじさんを背に積んだ馬の後を、とことんついていった。今まで神殿から出ることなく生きてきた私は、こんな長距離を歩いたことがなかったから、すぐに疲れて置いていかれてしまう。だけど、私は体力を回復する方法を発見してしまった。自分自身のために祈ればいいのだ。祈ると、すーっと疲れが消えて歩き続けられる。兵士さんたちが休まず馬車を走らせてくれたように、これならいくらでも歩けそうだ。

置いていかれそうになった私は、祈りの言葉を唱えながら駆け足で追いついた。

「体力あるんだね」

心配そうに待っていてくれたステファンが感心したように言う。ちよつと得意な気持ちになっていたら、先を進んでいたライガが振り返った。

「また途中で倒れるなよ。もう俺は、運ぶのは嫌だぞ」

「大丈夫だよ」

私が言い返すと、ステファンが笑った。

「疲れたら言いなよ。ライガが運んでくれるから。さっきのは『無理だったら言ってくれ。運ぶか

ら』っていう意味だよ」

「違えて。次はお前がこいつを運べよ」

「それでもいいよ。とにかく、疲れたら言っただけ」

「まだ大丈夫です！ ありがとうございます！」

そんな調子でずんずん進んでいくと、道の先にレンガ積みみの門が見えてきた。

ようやく街に到着？ 初めて見る、知らない国の街だ。わくわくして足取りが軽くなる。

そこで急にステファンが立ち止まった。

「ライガ、そろそろ人間姿になって、シャツを着てくれ」

ライガは立ち止まり、ちらりと私を見た。

「……ここで？」

「その姿だと、検問で止められるだろ」

「……わかったよ」

またちらりと私を見ると、彼はぶつきらぼうに言った。

「後ろを向いててくれ」

「え、どうして？」

「いいから」

ステファンがからかうように言った。

「レイラ、悪いけど、後ろを向いてやってくれないかな。こいつ、照れ屋なんだ」

「いいですけど……」

私は後ろを向いて、首をかしげた。

しばらくすると「いいぜ」とライガの声がした。――振り返った私は、目を大きく見開いた。

「え、ライガ？」

そこにはさらりとした銀髪の若い男の人が立っていた。彼は長めの髪を無造作に縛ると、私を睨んだ。

「そうだけど？」

狼の濁った声と違う、普通の声だ。でも口調や鋭い緑色の瞳は間違いない、さっきまで一緒に歩いていた、ズボンを穿いた二足歩行の狼そのものだった。

「狼姿より人間姿のほうに驚かれるのは、初めてだ」

ライガは不思議そうに呟いた。

マルコフ王国に入るための門の前には甲冑姿の兵士さんが立っていて、旅人らしい人たちが数人並んでいた。

私たちもその列に並ぶ。そこでステファンが「レイラはなにも言わず黙っていてね」と唇に人差し指を立てて、小声で言った。……どうということ？ 考え込んでいる間に、私たちの番になった。

「通行証または冒険者証、商業許可証を出しなさい」

兵士さんがそう言うと、ステファンとライガはさっと首に下げた金属の札を出した。

……その札はなに!?

私はあわあわと混乱した。兵士さんは馬に縛りつけられたおじさんに目を丸くして、それからどうしたらいいかわからずきよきよしている私を見つめた。

「この縛られている男は布の行商人か？ どうして縛っている？ それに、その女の子は通行証がないのか？」

「わ、私は、キアラ王国で聖女を……むぐっ」

二人にしたのと同じ説明を言おうとしたら、横からライガが私の口を塞いだので、後半はもごもごした音だけが響いた。ステファンが兵士さんに流暢に答える。

「すみません、まだ混乱しているみたいで。僕たちは、この行商人に護衛としてルシドドで雇われました。けれど道中、彼が竜の卵とこのクラフトリン族と人間のミックスの少女を荷馬車に隠して、違法魔物取引と人身売買を企んでいたことを発見し、捕まえました」

（人身売買？）

私は顔を青くした。物騒な言葉だ。見ると、馬に乗せられたおじさんが青い顔で、口輪越しに歯をカタカタ鳴らしている。

「クラフトリンと人間のミックス……」

兵士さんは私の顔を覗き込んだ。ライガが私の口から手を外すと、「合わせろ」と小声で指示を出す。

「……そ、そうなんです」

私は編み込んだ左右の髪を耳にかけた。

「私、こう見えて十六歳なんですけど」

「——確かに、耳が少し尖っているような……？ 初めて見るな……、珍しい」

兵士さんはじろじろと私の耳を見た。恥ずかしい……。なんでこんな嘘をつくんだろう。

「B級冒険者——」

兵士さんは二人の持っている銀色の金属片をじっくり見ると、敬礼した。

「いつもお疲れ様です。ギルドへの報告、よろしくお願いします」

「こちらこそ、お疲れ様です」

ステファンはにっこり笑うと、そのまま馬を引いて門をくぐった。

「——どうして、あんな嘘をついたんですか」

私は小声で彼に聞く。

「キアラ王国で聖女をやっていたなんて、あんまりでかい声で口外しないほうがいいぜ」

ライガが先に耳打ちしてきた。

「あの国、冒険者ギルドも魔法使いギルドも入れてないし、秘密主義でみんな興味を持っている。

光神教の上層部が国内を仕切っていて、すごい金を持っているって噂だしな。その聖女様だと知

れたら、誘拐されてなにされるかわかんないぞ」

「そ、そうなのっ？」

私は思わず大きな声を出した。そんなこと、全然知らなかった……。兵士さんたちここまで送ってもらっていたら、どうなっていたんだろう。すんなり入れてくれたのかな。

「ごめんね。事前にきちんと説明しなかった、僕が悪い」

ステファンは頭を掻いて、「さて」とどろどろ震えているおじさんを睨んだ。

「魔物の違法取引に人身売買まで加えたら、魔法使いギルドに引き渡しの上で人体実験確定でしようが、どうしますか？ 竜の卵の取引相手を明かしてくれたら、罪状は調整できますけどね」

おじさんは口をばくばく動かしていた。ステファンは短剣を抜き、剣先で口輪を切る。

「言う、言う、話すよ」

おじさんは青ざめた顔で何度も繰り返した。



私たちは連れだって、街の中心部にある冒険者ギルドに入った。大きくて立派な建物だ。カウンターに座っている長い黒髪が綺麗な女の人が、笑顔でこちらに手を振る。

「あらっ、ステファンじゃない。二週間ぶり？ ルシドドまで護衛で行っていたのよね。会えなくて寂しかったわ」

「リル、俺もいるぞ」

ライガが不機嫌そうにステファンの後ろから顔を出す。女の人——リルさんは「ふふふ」と口に手を当てて笑った。

「わかってるわよ。あなたたちは二人でセットだものね。今日は——」

彼女は私と、手を縛られて連行されている密売のおじさんに視線を向けた。

「あらあら、なんだか物騒ね。それに、ずいぶんとかわいい女の子まで連れて……」

「そのことで話があるんだ。ちよつと奥の部屋使えるかな。所長と話したい」

リルさんは「わかったわ」とうなずき、立ち上がって奥の扉を開けた。

「ライガ、僕は所長と少し話してくるよ。レイラのこと、頼んだよ」

そう言い残すと、ステファンはおじさんを連れて奥の部屋に消えていった。

ライガはカウンターに寄りかかり、リルさんに話しかけた。

「リル、俺たちが留守の間になにかあったか？」

「特になにも。それより昨日、キアラ王国との間の街道で火竜が飛んでいたって報告があったけれど、あなたたち大丈夫だったの？」

「ああ、それな。襲われたのは、俺たちだ」

ライガがうなずくと、リルさんは目を見開いた。

「火竜に襲われたの？ でも、竜は飛んで山に戻っていったっていうけど……あなたたちは怪我もなさそうだし。どういふこと？」

「竜は卵を盗られて怒っていただけだ。卵を返したら、帰っていった」

「ああ、それで『所長に話』ね。……でも、そんなことってある？ 怒った竜が人を襲って、死者も怪我人も出さずに大人しく帰っていったなんて話、聞いたことないわ」

「こいつがやった。怒ってる竜を『祈り』で鎮めたんだよ」

ライガが急に私を前に押し出した。

「この女の子が？ それにこの子の服装……、光神教の神官？」

リルさんは私の砂埃で汚れた、元は白い神官服を眺めた。

「ああ、こいつが『祈り』で童を大人しくさせたんだ」

「まさか」

リルさんは目を白黒させて私を見つめた。——そんな驚くようなことなのかな。

「そう、それで、こいつの冒険者証を発行してほしいんだ」

思い出したようにライガが言う。

そう、それ。今後のために冒険者として登録をしたいんです、私は。

「ええ……？ でも、この子、いくつ……」

リルさんが私を上から下まで眺める。私は息を吐くと、早くも言い慣れてきた台詞を口にした。

「クラフトリンと人間のミックスです。十六歳なので登録お願いします」

「クラフトリンと人間の……あらまあ、珍しい」

リルさんは少しかがんで私と視線を合わせると、優しげに聞いた。

「お父さんとお母さんのどちらがクラフトリンなの？」

『お父さん、お母さん』という言葉聞いて、じんわりと目頭が熱くなった。なんだか昨日から感情の揺れが激しい。今までこんなに誰かと話をしたこと、なかったからかな……

「……わからないんです。両親は、『育てられないから』と、私のことを神殿に置いていってし

まったみたいで……」

「あらあら。辛いことを聞いて、ごめんなさいね」

リルさんは私の頭を撫でると、カウンターのなかからなにか袋に入ったものを取り出して、私の手に握らせた。

「これをあげるから、そんな悲しそうな顔しないでちょうだい。今、冒険者証を作ってあげるからね。文字は書ける？ これに必要事項を書いてね」

渡された紙には、「名前・生年月日・出身地・種族・職業・技能」と書いてある。

ええと。名前はレイラ、生年月日は八九八年一月一日。……誕生日は正確な日付がわからないから、とりあえず一年のはじめに生まれたことになっている。——出身地はキアラ王国、種族は暫定で人間とクラフトリンのミックス……

「職業・技能ってなに？」

私はライガに聞いた。

「できることだな。使える魔法の種類とか……、パーティーを組む時の参考にする程度だから、自称でいいんだけど」

「ステファンとライガはなに？」

「ステファンは、職業『剣士』、俺は『格闘家』だな」

「ライガって格闘家なの……？」

「まあ、剣とかの武器を使わないし……」